聖　書：創世記 26：1〜11
説教題：また飢饉が
日　時：2023 年 12 月 31 日（朝拝）

創世記 26 章はイサクの信仰の歩みについて集中的に記している貴重な章です。前の 25 章ではイサクとリベカの間に双子の男の子、エサウとヤコブが誕生しました。そしてさっそくその二人の将来を暗示する出来事が記されました。またこの後の 27 章以降では、その二人をめぐるゴタゴタが描かれて行きます。その話が進む前に、この 26 章でイサクの信仰に関することがまとめられています。おそらく今日の記事はイサクがリベカと結婚してから二人の子どもが生まれるまでの 20 年の間に起こったことと考えられます。この 26 章の記事の主眼はアブラハムへの主の契約が確かにイサクに受け継がれたことを示すことにあると思われます。イサクはアブラハムの子として主の契約を担う者となります。ヤコブの話が綴られて行く前にまずそのことが確かにされています。契約を継承するイサクはどういう信仰に歩む人だったかがここに記されています。

この箇所を読んで思うことはアブラハムに起こった出来事とよく似ているということではないでしょうか。最近、デジャヴという言葉がよく使われますが――既視感と訳され、まだ見たことがないはずなのに、すでにどこかで見たような感覚にとらわれることを指しますが――まさに今日の記事はそうです。どこかで見たことがある。確かにアブラハムの時とそっくりのことが起こっています。1 節に「さて、アブラハムの時代にあった先の飢饉とは別に、この国にまた飢饉が起こった」とあります。それでイサクはゲラルのペリシテ人の王アビメレクのもとへ行きました。彼はそこを通っておそらくエジプトへ下って行くつもりだったのでしょう。飢饉の時は穀倉地帯のあるエジプトへ避難するというのが当時の人々の一般的考えであったようです。

しかし主はイサクに現れて、「エジプトへは下ってはならない。わたしがあなたに告げる地に住みなさい」と言われました。今日の記事はアブラハムに起こった出来事と良く似ていますが、この部分は違います。アブラハムの時は、このような主のストップはありませんでした。アブラハムはそのままエジプトへ下り、そこで大変なことが起こりました。しかしイサクの時には「エジプトへ下るな」という主の声がありました。このことは主の扱いは一人一人みな違うことを示しています。その人その人によ

って主の導き方は異なるのです。今回のイサクについては、主はエジプトに下らずに、この地に寄留しなさいと言います。このゲラルは約束の地の南西端にあったと思われます。つまり約束の地内にとどまれ！と主は言われました。そして主はアブラハムに与えた約束をもう一度繰り返しておられます。3〜4 節にある通り、わたしはあなたとともにいてあなたを祝福すること、あなたとあなたの子孫にこれらの国々、その土地を与えること、その子孫を空の星のように増し加えること、そしてあなたの子孫によって地のすべての国々は祝福を受けるようになること。これらはみな創世記 12 章 1〜3 節でアブラハムに語られた召命の時の約束と同一です。主はここでアブラハムに誓った誓い、すなわちアブラハム契約をイサクにおいて更新しようとしておられます。

その際、注目すべきは 5 節です。主はこう付け加えられました。「これは、アブラハムがわたしの声に聞き従い、わたしの命令と掟とおしえを守って、わたしへの務めを果たしたからである。」　これはもちろん人間の善い行いが神の祝福あるいは神の救いを勝ち取るという意味ではありません。しかし神の祝福を受けるプロセスには神の命令に従う私たちの生活も重要な一部として含まれることを教えるものです。私たちは良い行いによって救われるのではありませんが、良い行いをするようにと救われました。律法を守ることによって救いを獲得するのではありませんが、だからと言って律法を投げ捨てるのではありません（＝無律法主義）。正しい立場は、恵みによる救いを得た者は、その恵みの力によって律法を行う者へと導かれて行く。そこに主につながっている信仰に生きている者であることが具体的に表されて行かなければならないということです。

5 節の「アブラハムがわたしの声に聞き従った」からという言葉は創世記 22 章 18 節の主の言葉を思い起こさせます。22 章は有名なイサクを献げた出来事を記した章です。アブラハムの信仰は一人子イサクさえも献げるという神の言葉に従う歩みに現されました。その彼の行いを見て主は 22 章 18 節でこう言われました。「あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたが、わたしの声に聞き従ったからである。」　ここでも今日の箇所と同じ言い方がされています。またここで、わたしの「命令」「掟」「おしえ」「務め」と言葉が積み重ねられていますが、同じような表現は申命記 11 章 1 節にも見られます。「あなたはあなたの神、主を愛し、主への務めを果たし、主の掟と定めと命令をいつも守りなさい。」　これらは全部、律法を指し、律法の様々な側面がこのように表現されていると考えられます。アブラハム

は決して罪のない人ではありませんでしたが――むしろ多くの失敗をした人でしたが――彼の全生涯はこのように「アブラハムがわたしの声に聞き従い、わたしの命令と掟とおしえを守って、わたしへの務めを果たしたからである」とまとめられています。そのようにアブラハムが主に従いつつ、より頼んだ神の契約が今、イサクに受け継がれようとしています。イサクも同じように主に従う信仰に歩む者でなければなりません。

果たしてイサクはこれにどう応答したでしょうか。6 節に「こうしてイサクはゲラルに住んでいた」とあります。つまり彼は主の言葉に従ってゲラルにとどまったのです。人間的に考えればエジプトに行った方が食べ物は豊かに手に入ります。ゲラルにとどまることは人間的には心配です。しかしイサクは主がとどまれ！と言われたところにとどまりました。たとえ難しいと思われても主に従うところにこそ祝福はあります。主は備えてくださる神です。その信仰に立ってイサクはとどまりました。アブラハムに倣って信仰の道を進んだイサクの姿がここにあります。

しかしそのゲラルでさっそく次の試練が訪れます。ゲラルに滞在中、その土地の人々がイサクの妻のことを尋ねました。それは 7 節最後にある通り、彼女が美しかったからです。彼女は結婚している身なのか、それとも独身なのか。そこでイサクはどうしたでしょう。すると彼は「あれは私の妹です」と答えたと言います。これもまたデジャヴですね。どこかで見た気がする。つまりアブラハムと全く同じことをイサクはしています。ある人はあまりにもこの話が似ているので、アブラハムに起こったことが間違ってここにもコピーされたのではないかと言います。しかしアブラハムの時と違う点も色々あります。また同じことを繰り返してしまっているという点にこそ、むしろ深い意味とメッセージがあると思われます。

なぜイサクはこのような偽りを述べたのでしょうか。7 節に「この土地の人々がリベカのことで自分を殺しはしないかと思って」とあります。人々はリベカを自分の妻としたくて、邪魔になる私を殺すかもしれない。しかし問題は人々の側にあったのではありません。問題はイサクの信仰にありました。少し前に主は「わたしはあなたとともにいる」と約束くださっていました。その主に信頼して、偽りなど述べない道があったはずではないでしょうか。しかしイサクは主を恐れるよりも、人間の声を恐れてしまい、自分の知恵と力で自分を守ろうとしたのです。

結果はどうだったのでしょう。イサクは長くそこに滞在していました。そんなある日、ペリシテ人の王はイサクがその妻リベカを愛撫している様子を見ました。これは二人が夫婦でなければあり得ない姿でした。兄弟同士ではあり得ない姿でした。そこでアビメレクはイサクを呼び寄せて問い質します。「本当のところ、あの女はあなたの妻ではないか。なぜ、あなたは『あれは私の妹です』と言ったのか。」　それに対してイサクは「彼女のことで殺されはしないかと思ったからです」と答えました。アビメレクは10節でこう言います。「何ということをしてくれたのか。もう少しで、民の一人があなたの妻と寝て、あなたはわれわれに罪責をもたらすところだった。」　以前、アブラハムの時もアビメレクという王が出て来ましたが、――おそらくアビメレクとは称号で、今回のアビメレクはアブラハムの時のアビメレクとは別人と思われますが、――ここでもこの土地の王は高い倫理観・道徳観を持っていたことが分かります。彼は姦淫の罪を民の内の一人が犯すことを恐れています。そしてすべての民に次のような命令を出しました。「この人と、この人の妻に触れる者は、必ず殺される。」

今日のこの二つ目の記事では、ある面から言えばイサクとリベカに対する主の守りが語られていると読むことができます。もしイサクが嘘をついたままで、リベカが誰かの妻となったら、一体どういうことになったでしょう。アブラハムから始まった神の約束はそこでThe Endとなるところでした。2代目にして神の救いの計画は頓挫するところでした。しかし、ともにいると言われた神がこうして彼ら夫婦を守ってくださいました。ただ神の憐みによって彼らは守られました。

しかしだからと言って、良かった！良かった！と言って終わりにすることはできません。イサクがしたことは不信仰の歩みです。神を信じずに、自分の知恵、人間的な知恵に彼は頼りました。そうすることで自分をかえって危険な中に起きました。また彼は自分が殺されることを恐れてウソをつきましたが、果たしてリベカのことはどこまで考えたのでしょうか。自分はそれで助かるかもしれませんが、リベカはどうなるのか。神を恐れず、人を恐れると、人間はこのように自己中心になってしまうことも教えられます。そして彼のこの行動は良い証になりませんでした。異邦人の王から「何ということをしてくれたのか！」と叱られました。本来、周りの人々への祝福となるべき存在なのに、かえって周りに迷惑と害を及ぼしています。そしてそのことで神の評価に傷がつけられるようなことをしています。召命と丸っきり反対の歩みをしてい

るイサクの姿がここにありました。

以上の箇所から私たちは何を自分に当てはめて、学び取るべきでしょうか。二つのことを述べたいと思います。まず一つ目のこととしてイサクは今日の箇所で罪を犯し、神の栄光を大いに傷つけましたが、その彼はなお神によって導かれて行きます。次の箇所に目をやると、こんなイサクがなお主によって祝福される様子が記されています。もしかすると神の対応は甘いのではないかと思う人もいらっしゃるかもしれません。しかし私たちが思うべきは、私たち自身もここのイサクと同じではないかということです。私たちは今日の箇所のイサクを見て正しく責めるべきです。彼の失敗から学んで同じ道を行かないように戒められるべきです。しかし今日の箇所は私たち信仰者の間でベストな人々でさえ、こうであったという事実を告げています。とするなら私たちもまた同じような誤りに陥りやすい者たちであることをまず思うべきではないでしょうか。この年末の礼拝において思い巡らすべきは、実は私たちも今年何回もこのような過ちを神の前に犯して来た者なのではないかということです。そういう私たちが今日もこうして神の御前に立たせていただいており、神の民として祝福の内に導かれています。とするなら私たちもこのイサクと同じです。御前にふさわしくない多くの罪を犯して来た者であるにもかかわらず、主は私たちを投げ捨てず、憐れみと寛容をもって今日もこのように信仰の歩みを支え導いてくださっています。そのことを覚えて私たちは神に心からの感謝の礼拝をささげたいのです。ただ主の憐みにより、今日ここまで、今年最後の日まで導かれて来た者たちであることを告白したいのです。

しかしそこで止まってはなりません。もう一点は今日の記事の特徴はかつてのアブラハムの記事とそっくりであることでした。アブラハムも今日の箇所のイサクと同じ過ちを犯したことがありました。しかしそのアブラハムが 5 節で「これは、アブラハムがわたしの声に聞き従い、わたしの命令と掟とおしえを守って、わたしへの務めを果たしたからである」と言われていました。これはイサクにとって希望を与える事実ではないでしょうか。同じ失敗をしたアブラハムも生涯を終えた時には、主から「わたしの命令と掟とおしえを守った」と言われました。ですからイサクにもこれと同じ道が開かれているということではないでしょうか。果たしてイサクはアブラハムと同じように失敗から学んで成長する道を進んで行くのか、がこれから問われることになります。

私たちはどうでしょう。私たちは今年を振り返り、イサクと同じ罪を犯して来た者であることを思うかもしれません。しかしいつまでもそこにとどまっていてはならないということです。そこからなお成長する者でなければなりません。同じ罪を犯したアブラハムは、その生涯を終えた時、主から 5 節のように言われる人となりました。またその彼の歩みのゆえに続く世代の者たちが祝福されると主は言われました。私たちの前にあるのも同じ歩みです。私たちも今年一年のここまでの主の恵みを感謝したいと思います。ただ主の忍耐と憐みによって私たちの歩みはここまで守られて来ました。しかしこの恵みは私たちが、その信仰の歩みにおいてさらに成長するためのものです。そのような主の思いがあることを受け止めて、恵みによって一層主に従う者となることを祈り求めたいと思います。その歩みをもって願わくは後に続く人たちの良き模範となり、またその人々にいくらかでも祝福を残す歩みができることを主に祈り、新年の歩みを求めて行く者たちでありたいと願います。